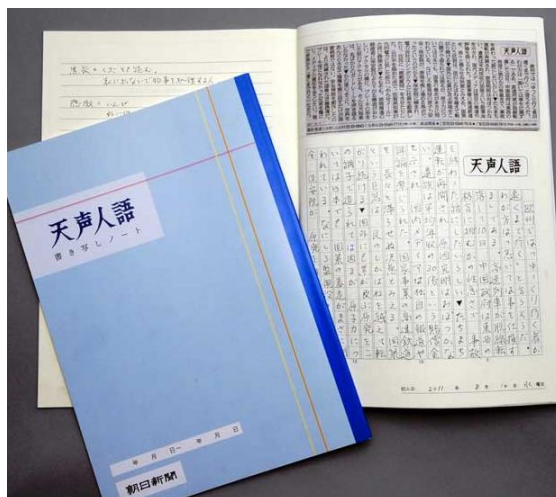


2013 年2月

「新聞のコラム」書き写しのすすめ

朝日新聞のコラム「天声人語」を書き写すための専用ノートが人気を集めているという。2011年4月から全国の朝日新聞販売所限定で販売されたが、顧客からの問い合わせの多さから大手書店や大手文具店など急速に販路が拡大し、発売後4カ月で36万冊を売り上げたという。購入層は小学生～大学生、母親世代、シニア層と幅広く、シニア層は老化防止や日課のひとつとして実践されているようである。



「天声人語書き写しノート」はA4判で1冊210円。見開きの右上にコラムの切り抜きを貼り付け、下段の原稿用紙マス目に、603字の記事を一言一句逃さずに書き写す。また、左上には記事の感想やコラムのタイトルを考えて書くなど、メモできる欄もあり、A4版1冊で1カ月分を書き込めるようになっている。ノートの説明には、「毎日続けると、世の中のいろいろなできごとがわかる。知っている言葉がどんどん増えて、文章の構成力やリズムも身につく」と書き写しの効果が書かれている。認知症予防のため日課として「天声人語」を17年間書き写し続けているという77歳男性もいるという。

生来の新し物好き、物好きの血が騒ぎ、この専用ノートを買って書き写しを始めた。昨年4月のこと。当時は読売新聞だったので、「編集手帳」の書き写し。今年から「天声人語」に変わった。最初は「めんどくさいかなー」とも思っていた「書き写し」という不毛な作業。いつまで続くかと思っていたが、なんと1年以上も続いている。説明にある効果のひとつ「文章力の向上」は、今のところそれらしい体感はない。ただ、「手書きの気持ちよさ」を味わえたというだけで、それはもう尊い体験。間違いなく「やって良かった」。即時的な効果は見えないまでも、「書くことの気持ちよさ」を思い出させてくれるわ、「読むことの素晴らしさ」を再確認させてくれるわで、かなり素晴らしい挑戦だったように思う。最後の1字まで埋める「ゲーム感覚」や「脳トレ」的な楽しさ、達成感の気持ち良さが、ただ「文字を書く」というだけの行為から導かれるのはなんとも不思議だ。ぜひ皆さんにもお勧めしたいと思う。

こうして書き終わった14冊のノートを見ていると、時の流れの速さを改めて痛感している次第。

新聞各紙は、朝刊の1面下段にコラムを設けている。朝日新聞だったら「天声人語」、読売新聞だったら「編集手帳」、毎日新聞だったら「余録」。これらコラムは、字数に限りがある。そのため、段落を改める代わりに、黒い記号を使って「ここが段落の分かれ目ですよ」と区切っている。天声人語は、五つの「▼」で区切られた六つの段落から成る。最初の段落は、読者をグッと引きつける「つかみ」で、筆者が苦勞する最初の関門。この段落の出来栄がコラム全体の印象に影響する。第2～5段落では、その日のテーマの説明や、それにまつわる議論の紹介などが中心。最後の第6段落は、コラムの結論。「読後感」を左右するため、極めて重要。ニュース面に載っている解説記事の結論と同じでは面白みがない。どうやってコラムらしい余韻を残しながら締めくくるか。筆者はパソコンを前に悩み、言葉を絞り出す。

決まった文字数で、毎日書かれているコラムは、時々の時事的な話題を入れながらも、それだけではない、含蓄がある。短く分かりやすく、それでいて、訴えかける文章というのはなかなか難しいもの。新聞のコラムは、そうした文章の一つではないでしょうか。